

# 光といのち

第101号

— お盆 —

2016年7月15日発行

発行所

真宗大谷派勝善寺

〒299-2214

千葉県南房総市二部1344

電話 0470-57-2657

FAX 0470-57-2290

メール info@syozenji.or.jp

HP http://syozenji.or.jp/

住職井上孝昌(釋孝昌)

法語

自信教人信の

誠を尽くす。

『真宗大谷派宗憲』

## 勝善寺同朋の会結成10年

2006年7月23日、故川名琢磨氏・故能重実氏・関口昌司氏・鈴木正一郎氏と故前住職・現住職の六人で結成しました。以下の文章は、寺報に同封したそのお知らせの一部です。



2006(平成18)年7月23日撮影

「この会は、誰もが参加できる「聞法会」です。念仏の教え(釈尊や親鸞聖人の教え)に聞いていく会です。そして、世間のしがらみや自分の思いに縛られて息苦しく汲々として生きていく私たちが、念仏の教えに生きることで世間の中にあるがらみから解放されていくことを目的とする会です。」

「勝善寺同朋の会」結成は、「本山(東本願寺)が宗祖親鸞聖人に出遇う根本道場となり、寺が念仏の教えを聞く道場になり、門徒が名実ともに念仏の教えに生きる真宗門徒となる」真宗同朋会運動の活動の一つです。

高度経済成長長期に私たちは、物の豊かさ生活の便利さ快適さのみを追い求めました。その潮流の中で浄土真宗の寺々も江戸時代以来の檀家制度に経済的にまもられて葬式仏教に墮しました。そのため真宗門徒の信心は「真宗門徒一人もなし」(宗門白書)という状況となりました。そこで、親鸞聖人の七百回御遠忌を機に浄土真宗の信心を回復するために、宗門自身が自己批判と懺悔をし一九六二(昭和三十七)年にこの運動は始まりました。

遅ればせながら、新たに二名の推進員が誕生したことを機に、「勝善寺同朋の会」を結成することにしたのでした。

この時に誕生した二名の推進員は、釋志勇 関口昌司氏(上の写真後列右) 釋徹照 鈴木正一郎氏(同写真後列左)でした。

その後、2013年に釋征道 増田征夫氏(写真右)が、20



15年に釋晋求 田村晋一氏(写真中)が、そしてこの度 釋喜法 川名喜昭氏(写真左)が、定められた研修を受け推進員として誕生しました。

題字下の言葉は、当派『宗憲』前文にある「すべての宗門に属する者は、常に自信教人信の誠を尽くし、同朋社会の顕現に努める」から採りました。

「自信教人信」は「自ら信じて人を教えて信ぜしむ」と読みます。自ら(みづか)が聞法生活を励むことが、自ら(おの)から人を感化していくという意味です。

まず住職と各推進員が自信教人信の誠を尽くします。勝善寺同朋の会は、そのことにより再出発できます。

盂蘭盆会八月十日(水)十時〜十一時半

## 推進員の研修に参加して

釋喜法（川名喜昭）

住職より推進員の研修に参加してみませんかとお話しがあり、二月に東京の練馬区にあります真宗会館で前期研修、六月には京都の東本願寺で後期研修を二泊三日で受けてまいりました。

東本願寺の御影堂は五年前に修復され、阿弥陀堂（本堂）は今年の三月に修復工事が完成し、終わればばかりで中に入りますと煌びやかで感激しました。これで平成の大修理は終わった様です。

今回は全国から六十三人の参加者があり、各班に分かれ、私は東京教区からの七人の参加者の一人として、この班で研修し、内容は次の通りです。

一日目は、結成式・両堂参拝・オリエンテーション・講義・座談、終了は夜九時、入浴・就寝。  
二日目は、六時起床・清掃・晨朝参拝・帰敬式・講義・座談・清掃奉仕・諸殿拝観・講義・宣誓文作成、終わりは一日目と同じ。  
三日目は、前日と同じ様にはじまり、九時より宣誓式、前日作成した宣誓文を親鸞聖人の御真影の前で各班ごとに宣誓し、宗務総長より推進員証を受領してまいりました。その後、講義を受け解散式で終了しました。

三日間は短かったです。緊張の連続でした。推進員は、住職と共に率先して、親鸞聖人の教えを広める手助けをする役目だと考えております。

最近はお寺の行事に多くの御門徒が参加され、聞法される様になってまいりました。以前とは大きく変わりました。私も心新たに親鸞聖人の教えを聞き、お念仏申す生活を心がける様、努力してまいりたいと思いますので、宜しくお願いいたします。

## 宣誓

今日からは真宗門徒として、心新たに次のことを誓います。

- 一 自ら進んでお寺の行事に参加します
- 一 同朋との語り合いを大切にします
- 一 日々の生活の中で、教えを聞き念仏申します

二〇一六年六月二十三日

東京教区推進員教習

修了者一同

3900第 05 - 2399 号


真宗同朋会  
推 進 員 証

東京教区  
川名 喜昭

あなたは、真宗同朋会の推進員教習を修了し、推進員となられたことを証します。この上ともいよいよ教法を聞信し、真宗同朋会の趣旨を弘め、その推進に尽力されることを念じます。

2016年6月23日

宗務総長 里 雄 康 意



※推進員となつてくださる方を募集しています。仏教に関心のある方、親鸞聖人の教えに興味のある方、寺が好きの方、人生に苦悩しておられる方、お申し出ください。

## 勝善寺同朋の会

この会は、親鸞聖人の開顕された浄土真宗を、我が身の上でいただいでいく聞法会です。そのために、一緒に仏法を聴聞し語り合います。

この信心の歩みが、すべての人間を平等に救う普遍の大道であり、それが浄土真宗であると親鸞聖人は開顕されました。

この歩みをするむ人々を「同朋」と言います。「同朋」は、同門の友・朋友という意味です。

本願念仏の信心に生きる「同朋」の集いが勝善寺同朋会です。

このところ10数名の御同朋と仏法を聴聞し語り合っています。

「あなた」のご参加をお待ちしています。実施日は、6ページの行事予定を見てください。

- ・ 14時～16時（変更あり）
- ・ 参加費 一回 500円
- 一 真宗宗歌斉唱
- 一 勤行 正信偈 念仏和讃 回向
- 一 法話 住職
- 一 恩徳讃斉唱

「人生は、やり直すことができない。しかし、見直すことはできる」金子大栄

勝善寺同朋会テキストは、『正信偈の教えーみんなの偈』です。

これは九州大谷短期大学長であった古田和弘先生が、2002（平成14）年7月から2009（平成21）年2月まで78回にわたって『同朋新聞』に連載されたものです。現在は、それが3冊の単行本となって東本願寺出版から刊行されています。

7月17日の会は、第48回「遊煩悩林現神通 入生死園示応化」（『真宗大谷派修行集』20ページ）の部分のお話しでした。

この文章は、第1回「連載にあたって」です。次の10年に向けての再出発にあたり、皆さまに読んでいただきたく掲載します。この会参加の契機となれば幸甚です。

「正信偈」は、日ごろのお勤めに用いられる聖教です。ですから、多くの人が親しんでおられると思います。「正信偈」は、親鸞聖人が、ご自分のところに伝え届けられた念仏の教えの伝統を、深い感銘をもって受けとめられ、そして、その感銘を味わい深い詩（偈文）によって、後の世の私たちに伝え示してくださいましたものなのです。

偈文というものは、普通の文章にくらべると、一句ごとに文字の数に制限があります。そのため、理論的な説明には適しているとは言えません。しかし、心の感動を直截に、しかも味わい深く伝えるには優れた表現となります。親

鸞聖人はそのような表現の方法を選ばれたわけです。これはまさに、私たちに届けられている「いのちのうた」とも言うべきものなのです。

お勤めのときに、この偈文を人びとと共に声を調べて称えるのは、このうたに表わされている感動を味わいつつ、聖人が示された念仏の伝統の意味を一人ひとりが感謝をもって噛みしめ、その教えの大切さを互いに確かめ合うことになるのです。私たちが何を依り処にして生きてゆくのか、それを日々に確かめることになるのです。

「毎日のお勤めのときに『正信偈』をあげているけれども、その意味を詳しく考えたことがありません」という言葉をしばしば聞くことがあります。また、「言葉が難しくよくわかりません」ということもよく耳にします。なかには、「あれは呪文だと思っていました」と言う人もおられます。このたびは、そのような方々に、「正信偈」の言葉の意味と「こころ」とを何とかお伝えできればありがたいと思っております。

「正信偈」には、専門の学者が精魂込めて研究なさって著された書物がいくつ出版されています。けれども、多くは、専門用語が盛んに用いられていて、素人にはとても難しく、なかなか理解が及びません。そしてそれが理解できないと、自分には、親鸞聖人を仰ぐ資格がないような感じがして、とても不安になることがあります。

私は、学生として大谷大学で学び、後に教員として永らく勤めさせていただいた者でありますが、「正信偈」を専門的に研究してきた者で

はありません。そのため、私の理解には誤りや不十分さが多々あることかと恐れています。けれども、「正信偈」のお育てにあずかってこれた先人のご教示を仰ぎながら、私なりに、できるだけわかりやすくお話をすすめるような心がけたいと思っております。

昨年（二〇〇一年）四月から、私は、現在の短期大学に勤めることになりました。こちらの短期大学では、三つの学寮に、一二〇人ほどの女子学生が共同生活をしています。私は、一つの学寮の一室に住まわせてもらっています。学寮では、毎朝七時から寮の仏間で勤行を行います。私も参加させてもらっていますが、寮生たちは、大きな声で元氣よく「正信偈」をあげています。もともと「正信偈」のことなど、まったく知らずに入寮してきた新入生も、いつの間にか、「正信偈」も「和讃」も「回向」も、全部そらで覚えてしまうようです。

しかし彼女たちのほとんどは、仏教学科の学生ではありませんので、「正信偈」にはどのような教えが述べられているのか、その意味を学ぶ機会がありません。このことを私はいつも心苦しく思っているところです。それで、そのような若者たちに、せめて「正信偈」の語句の意味だけでも、伝えることができたいがたいことだとも思っています。

そのようなことを、あれこれと心に留めながら、「正信偈」の言葉を学び、「こころ」に触れるよう努めたいと思います。誤りや足らざるところは、ご叱正たまわれれば幸いに存じます。

水島見一先生は、大谷大学大学院博士課程で学ぶ当寺副住職釋泰昌（井上泰之）の先生です。以下の文章は、先生のご法話を文章化した『帰命の生活』という本の一部です。  
来年二月五日（日）当寺にて、先生のご法話をいただく予定です。  
ほんの一部分ですが、先生のご信心に触れ、当日に足をお運びいただけるよう掲載しました。

## 迷いの生活と帰命の一念

如來に帰命するには、親鸞しんらんが「されば、そくばくの業ごうをもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願ほんがんのかかじけなさよ」と言われているように、自分が業縁ごうえん存在であることを知らなければなりません。救いようのない宿業の身を持って余して生きていることに気付かなければなりません。『歎異抄たんにしやう』は、このような宿業の身に本願がはたらくことを教えます。これが帰命の一念の内実です。

帰命の一念について、私には清沢先生の『他力たからの救済』が思い出されてきます。

われ、他力の救済を念ずるときは、我が世に処するの道開け、われ、他力の救済を忘るゝときは、我が世に処する

の道閉づ。

もちろん、帰命の一念とは「念ずるとき」ですが、我々は、清沢先生が「念ずるとき」と「忘るゝとき」の二つを併記しておられることに、注目しなければなりません。我々の生活はいつも迷妄めいもう生活です。どこまでいっても、迷妄生活の連続です。そういう迷妄生活において、唯一、帰命することだけが我々を純化するのです。我々は迷妄生活の最中において、本願力ほんがんりきによって帰命の一念の発起ほつぎを実験できるのです。「念ずるとき」という帰命の一念にエゴが力を失い、「道開け」となるのです。

そしてそれは、「念ずるとき」という帰命の一念があるから、「道閉づ」という暗い生活がわかるといふことなのです。この「道閉づ」という暗い生活において「念ずるとき」が発起し、ここに「道開け」るので。我々は「念ずるとき」が目覚めた生活者であり、「忘るゝとき」とは目覚めない者の生活のように思うのですが、そうではなく「念ずるとき」と「忘るゝとき」の両方が、帰命の一念の相なのです。ですから娑婆にまみれた迷妄生活とは何かといえ、それは「念ずるとき」はもとより、「忘るゝとき」といふ思いもなく、ただ自分のエゴの通ることのみを模索している生活のことです。

それは、聴聞のない、自分の生活が閉じていることにまったく無感覚な生活で、エゴを通すために必死なだけの生活です。これが我々の生活の姿だと思えます。その生活において、何とか自分の中に帰命の一念をハッキリさせようというのが聴聞の第一歩なのです。しかし、帰命の一念は一念です。それがずっと持続するわけではありません。するとまた生活に埋没する。そこでまた帰命の一念をハッキリさせるために聴聞に立つ。その往復運動の生活が、帰命の生活であると言わなければなりません。

仏教は「後生ごしようの一大事」と言われますように、世に役立てるためのものではありません。「後生の一大事」ですから「生死しじゆうじを超える」ということが眼目です。自分にはたらく、自分を生死せしめる根源力に目覚めるものです。さきほどの「宗教的信念の必須条件」には、そのことにかかりはてることが必要であると説かれています。その意味で親鸞は、「後生の一大事」にかかりはてた方だと言えましょう。「かかりはてる」とは、娑婆を超えて聴聞道に身を投じる生活のことで、その意味で松原先生は親鸞と同様の、幸せな人生を生きられたのだと思います。

※1 他力の救済

清沢満之

我、他力の救済を念ずるときは、我が世に処するの道開け、我他力の救済を忘るゝときは、我が世に処するの道閉ず。

我、他力の救済を念ずる時は、我、物欲の為に迷わさるゝこと少なく、我、他力の救済を忘るゝときは、我、物欲の為に迷わさるゝこと多し。

我、他力の救済を念ずるときは、我が処するところに光明照らし、我他力の救済を忘るゝときは、我が世に処するところに黒闇覆う。

嗚呼、他力救済の念は、能く我をして迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟達安楽の浄土に入らしむるが如し。我は実に此の念によりて、現に救済されつゝあるを感ず。若し世に他力救済の教えなかりせば、我は終に迷乱と悶絶とを免れざりしなるべし。然るに今や濁浪滔々の闇黒世裡に在りて、夙に清風掃々の光明海中に遊ぶを得るもの、其の大恩高德豈に区々たる感謝嘆美の及ぶ所ならんや。『清沢満之の精神主義』

※2 松原(祐善)先生はお話の中で、

よく清沢先生の文章を紹介しておられました。その中の一つに「宗教的信念の必須条件」がありますが、その文章の中でも特に次の箇所に、先生が力を込めて読んでおられたことが印象に残っています。

真面目に宗教的天地に入らうと思ふ人ならば、**積尊**がその伝記もて教へ給ひし如く、**親も捨てねばなりませぬ**、**妻子も捨てねばなりませぬ**、**財産も捨てねばなりませぬ**、**国家も捨てねばなりませぬ**、**進んでは自分其者も捨てねばなりませぬ**。語を換えて云へば、**宗教的天地に入らうと思ふ人は、形而下の孝行心も、愛国心も捨てねばならぬ**。其他**仁義も、道徳も、科学も、哲学も**一切眼にかけぬやうになり、茲に始めて、**宗教的信念の広大なる天地が開かるゝのである**。

かう云ふて来ると或人は問ふであらう、それでは、**宗教を信ずるには家を出で、山林にでも隠遁しなければなりません**かと。そこで、私が思ふには、**何れも積尊のやうに必らず一度は山林に隠れねばならぬ**と云ふ訳でも

ない。又山林に隠れたって差支はない。身体が家にあらうと山林にあらうと、**商売をして居らうと、漁** **猟**をして居らうと、**学問をして居らうと、軍隊にあらうと、それはどうでもよいが、唯一つ肝心なのは、心で家や、職業や、妻子や、朋友や、国家や、学問や、知識やを頼みにしないやうになって、一心専念に如来に帰命するところにあるのです**。妻を持つてもよい、持たないでもよい、肴を食ふてもよい、食はないもよい、位の高いもよい位の低いもよい、知識のあるのもよい知識のないのもよい、家に居るもよい山林に行くもよい、これはどっちでもよい。たゞ**宗教的信念に入らうとする人は此等の事々物々に心が引かされ、心を擾乱するやうなことなく、只一すぢに如来にたよるやうにならねばなりませぬ**。

(『帰命の生活』3ページ)

※『帰命の生活』をお読みになりたい方は、差し上げますのでお申し出ください。

水島先生のご著書『苦勞はいいもんや』『如来に芝居させられていた人生』『臘扇』もあります。読んでいただければ嬉しいです。

# 勝善寺奉仕作業



6月26日(日) 8時30～10時30分

本年は、草刈りやガラス拭きに加え、桜の苗木を植えるために鐘突堂山斜面の樹木伐採、昨年に続き江月地区世話人吉本行男さんから彼岸花球根16ケースをご寄進いただき、第二墓地奥の30畝ほどの土地に植えました。

真宗寺院は、ご門徒の聞法道場として護持されてきました。法義相続とともに環境整備も皆さまのお力を支えに進めていきたいと思えます。



鐘突堂山斜面樹木伐採

- 参加者**
- |       |         |        |
|-------|---------|--------|
| 明石義久  | 朝倉敏夫    | 足達 崇   |
| 狩野平造  | 川名登支江   | 川名利幸   |
| 川名喜法  | 北村洋子    | 重田和夫   |
| 鈴木正一郎 | 大胡登美子   |        |
| 大胡睦恵  | 高梨維夫    | 田中嘉一   |
| 田中昭一  | 田村晋一    | 田村徹夫   |
| 田村 本  | 谷 英郎    | 富澤真知子  |
| 蘆居政男  | 中山秀巳    | 能重美恵子  |
| 姫松信子  | 堀海栄子    | 三堀 清   |
| 峯 信一  | 吉本行男    | 井上悦子   |
| 井上孝昌  | (敬称は省略) | アイウエオ順 |

## 東京教区同朋大会(六月三日(金))



文京シビックホールに東京教区各地から集まった1084人のご門徒と「正信偈」を同朋唱和しました。

藤原千佳子師の「わがままで負けず嫌いで 意地悪な私 得意さしてくれてありがとう。」という言葉が、心に響きました。

参加者は、釋喜法(川名喜昭さん)、釋晋求(田村晋一さん)、釋徹照(鈴木正一郎さん)と住職(釋孝昌)でした。

## 合同聞法会(6月5日(日))

八日講十日講員と同朋会員で聞法し、お茶席もありました。



## 古代蓮と本堂



古代蓮が咲きました！田村晋一さんから頂きました。蕾が開き三日で散りました。

## 行事予定

- 月曜日 6時30分〜 お勤め練習
  - 8月10日 10時〜 孟蘭盆会
  - 9月22日 10時〜 秋彼岸会
  - 10月9日 14時〜 同朋の会
  - 10月18日 13時30分〜 役員会
  - 10月23日 13時30分〜 世話人総会
  - 11月15日 13時30分〜 仏具御磨き
  - 11月18日 13時30分〜 準備・逮夜
  - 11月19日 10時30分〜 報恩講
  - 12月11日 14時〜 同朋の会
  - 12月31日 23時45分〜 除夜の鐘
  - 1月2日 10時〜 修正会
  - 1月8日 9時〜 八日講十日講
  - 2月5日 9時〜 水島先生講話
- ※親鸞教室・婦人研修会・門徒会総会の日取りは未定です。



真宗大谷派では、毎年のお盆に、この切籠灯籠を吊ります。「お盆(孟蘭盆)」の意味「倒懸」を表しています。「房州切籠」ではありません。